

エビネ属及び近縁属の交雑種の 開花について (I)

—— 種間交雑種について ——

磯 部 実

エビネ属とその近縁属において新品種作出および類縁関係をさぐるため本園ではかねてより、種間並びに属間交雑を試みている。

作出した交雑種のうち、これまでに開花した種間交雑種5種についてその特徴を記録する。

なお、交配親に用いた夏咲き種の花粉は、温室で栽培し、春咲きの母株と開花期の重なったものを用いた。無菌播種したフラスコは、25℃16時間日長で管理し、発芽苗は鉢上げ後、最低温度10℃のガラス室で管理した。

キエビネ (*Calanthe sieboldii*) とオナガエビネ (*C. masuca*) の交雑種

1977年5月7日にキエビネにオナガエビネの花粉を交配し、翌年6月16日に無菌播種し、多数の苗を得ることができた。1982年6月に初開花し、その後1986年までに約10株が開花した。開花期は不定期。

オナガエビネの草姿に似るが、オナガエビネより小形で、長さ30~40cm、幅7~10cmの長楕

円形の葉を4~5枚展開する。展開した葉の基部より、40~60cmの花茎を伸ばし、8~11個の花を粗につける。花の自然開張幅は、約5cm。花卉、萼片は細長く先はとがり長さ約2.5cm、幅1cm、唇弁は中裂片に濃色の3本の隆起線があり、中裂片、側裂片とも幅広くよく展開する。長さ約1.5cmの距をもつ。花色は個体差があり、白色、淡紫色、淡桃色などの変異がある。

10輪前後を粗につける花序や、3本の隆起線のある唇弁の中裂片などはキエビネの特徴を表わし、花に比較的長い距を持ち、幅広い花色の変異はオナガエビネの特徴を表わしている。

ツルラン (*C. triplicata*) とアリサンエビネ (*C. arisanensis*) の交雑種

1980年2月10日に、ツルランに台湾産のアリサンエビネの花粉を交配し、同年7月10日に無菌播種し、多数の苗を得ることができた。1983年12月に初開花し、その後1986年までに約10株が開花した。開花期は不定期。

草姿はアリサンエビネに似る。長さ35~40cm、幅7~8cmの光沢のある長楕円形の葉を3枚展開する。展開した新しい葉の中心より、20~30cmの花茎を伸ばし、4~5個の花を粗につける。花の自然開張幅は約5cm。花卉、萼片は桃白色で細長く、先はとがり、長さ約2cm、幅1cm。



キエビネ × オナガエビネ



ツルラン × アリサンエビネ

唇弁は桃色で半円形，中裂片に3本の隆起線があり，中裂片，側裂片とも幅広い。距は約2cm。

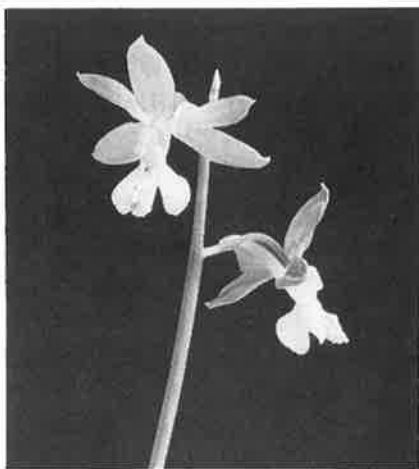
大きく発達した苞や中裂片と側裂片の裂け目の深い唇弁はツルランの特徴を表わし，幅の狭い光沢のある葉を3枚展開し，幅広く3本の隆起線をもつ唇弁の中裂片はアリサンエビネの特徴を表わしている。

エビネ (*C. discolor*) とホソバナエビネ (*C. graciliflora*) の交雑種

1980年5月12日に，ホソバナエビネの花粉を交配し，翌年3月5日に無菌播種し，多数の苗を得ることができた。1984年4月に初開花し，1986年までに5株が開花した。開花期は最低温度10℃のガラス室では4月。

草姿はエビネに比較してやや小形で，長さ約20cm，幅5cmの長楕円形の葉を3～4枚展開する。新芽の中心から20～30cmの花茎を伸ばし，2～6個の花をつける。花は小形で，自然開張幅は約3.5cm。花萼片は，表が橙褐色，裏が赤褐色で細長く，先はとがり，長さ約1.3cm，幅6mm。唇弁は白色で3裂し，中裂片，側裂片とも幅広く，よく展開し，中裂片に3本の隆起線がある。長さ約5mmの距がある。

幅広い花弁や萼片，唇弁はエビネの特徴を表わし，小形の株や花はホソバナエビネの特徴を表わしている。



エビネ × ホソバナエビネ

キエビネ (*C. sieboldii*) とホソバナエビネ (*C. graciliflora*) の交雑種

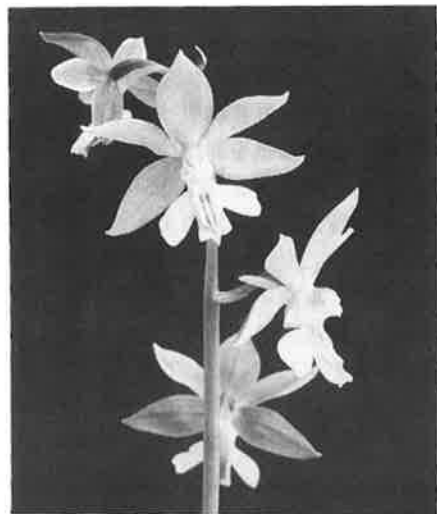
1980年5月12日に，キエビネに台湾産のホソバナエビネの花粉を交配し，翌年3月5日に無菌播種し，多数の苗を得ることができた。1985年4月に初開花し，1986年まで5株が開花した。開花期は最低温度10℃のガラス室では3～4月。

草姿はキエビネに比較してやや小形で，長さ約20cm，幅約7cmの長楕円形の葉を3～4枚展開する。新芽の中心から約30cmの花茎を伸ばし，3～4個の花をつける。花は小形で自然開張幅は約3cm。花萼片は，表が黄色で橙黄色のボカシが入り，裏は赤褐色で，細長く先はとがる。後方へややそり返り，長さ約1.5cm，幅約8mm。唇弁は黄色で3裂し，中裂片，側裂片とも幅広くよく展開し，中裂片に3本の隆起線がある。長さ約3mmの距がある。

黄色の花色と，幅広い花弁や萼片，唇弁はキエビネの特徴を表わし，小形の株で，橙黄色のボカシが入りそして裏面は赤橙色の花弁と萼片はホソバナエビネの特徴を表わしている。

カクチョウラン (*Phajus tancarvilleae*) とガンゼキラン (*P. minor*) の交雑種

1980年3月16日に，カクチョウランにガンゼキランの花粉を交配し，同年8月25日に無菌播

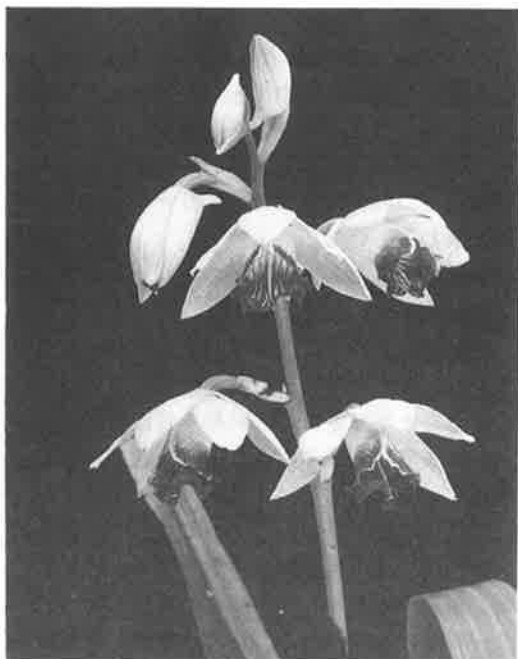


キエビネ × ホソバナエビネ

種し、多数の苗を得ることができた。1987年3月に初めて1株開花した。

長さ約30cm、幅約7cmの長楕円形で先が細くつながった葉を4枚展開し、葉柄は中心に集まって茎になってみえる。偽球茎は高さ約3cm、直径約2.5cmでやや四方に角ばり球形。偽球茎の基部より、約40cmの花茎を伸ばし、7個の花をつけた。花の自然開張幅は約7cm。花萼片は、表が薄茶色、裏は緑黄色で長さ約4cm。幅約1.8cm、肉質は厚く、幅広く、先端はとがり、平開しない。唇弁は薄茶色、先端部は赤褐色、長さ約3.5cm、幅3cm。唇弁の先端部はやや縮れる。蕊柱は内側に毛がある。花粉塊は8個。長さ約1cmの距がある。

やや四方に角ばった偽球茎、平開しない花弁や萼片、先端部が波状にやや縮れる唇弁、内側に毛がある蕊柱、短い距などはガンゼキランの特徴を表わし、茶色を帯び、先端のつながった花弁と萼片はカクチョウランの特徴を表わしている。



カクチョウラン × ガンゼキラン

中国地方のタシロランについて

世羅徹哉・青山幹男

タシロラン (*Epipogium roseum* Lindl.) は、わが国では、1906年に田代善太郎氏によって、長崎県諫早で初めて発見され、牧野富太郎博士によって命名された無葉腐生ランである。本種とその近縁種との関係を詳細に論じた津山尚博士の報告(植物研究雑誌42:295-311, 1967)によると、本種は、植物体の大きさ、花の形態や大きさにおいて変異に富み、オーストラリア、オセアニア、東南アジア、インド、ヒマラヤ、中国南部、南西諸島、九州、関東南部と非常に広い分布域を示している。しかし、これまで採集された記録は比較的少なく、同報告によるとわが国での採集例は、関東南部(三浦半島)の1ヶ所と九州(長崎、鹿児島、沖縄)の10ヶ所だけである。近年写真集などで四国や紀伊半島の一部にも自生していることが紹介されてい

る。なかでも、中馬千鶴(植物研究雑誌57:182-187, 1982)は、伊勢神宮宮域林において本種の生長過程を詳細に観察している。著者らは、中国地方での本種の新産地を確認し、花の細部を観察することができたので記録する。なお、観察した植物体は乾燥標本および液浸標本(FAA溶液)にして本園に保管されている。

著者らは、1984年7月24日、山口県熊毛郡上ノ関町長島の蒲井八幡宮社叢でフウランの自生状態を調査した際、スタジイの株元に本種が5個体叢生しているのを発見した。この内、最大の個体は高さ約40cmで14花つけていた。これらは全て子房が膨らんでおり、開花後数日経過していたものと思われる。更にその翌年、7月16日に再度調査した時には、約600m²の範囲に100個体以上が群生しているのを確認した。ほとんどの個体は高さ30-40cmで10-20花前後をつけており下部の花は結実していたが、先端付近の花は開花始めであった(図-1)。この様な個体を液浸標本および乾燥標本にし、後日花の細